

---

# Burn A Na・Blast ~バナナ・ブラスト~

縁異

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Burn Anna · Blast ジバナナ・ブラスト

### 【Zコード】

Z7975J

### 【作者名】

縁異

### 【あらすじ】

最強ルーキーと謳われる人物2人が、それぞれ別ルートでファンタジー世界を旅をするお話。彼らが旅の果てに見たものとは……

『Chapter 1 : episode 4 (banana side)』まで加筆修正しました。

# Chapter 1 : episode 1

(banana shade) · 無題

どーも、初めまして。

Veritasベニタスという者です。

このサイトに書き込むのは、初めてです。

なので、皆さん、

これから自分を、

バナナ・ブラストを、

暖かく見守つていってください！

お願いします！

どこまでも続く青い空。そこに描かれたかのような白い雲。そんな空に見下されるような形で俺は存在している。

俺が今いるのは、とある村 だった場所。今や最早、というか完璧廃村だ。そして俺の目線の先には、この村が廃村となつた原因である、ゴブリンがいる。

その数、実に100体。普通の奴らだったら、4、5人 のパーティを組まなければやられてしまうだろう。だが、ゴブリン100体に対して相手は俺一人。100対1。普通の奴だったらゴブリン共にリンチされて死んだな。

そう……普通の奴なら、な。

「……言つておぐが、先に手え出したのはテメエの方だからな。俺には関係無えけど、テメエらが人様の村をブツ潰したのが悪いんだろう？」

ゴブリン共にこんなことを話しかけてみたが、当然通じるワケも無く、ゴブリン共はギャーギャー鳴いている。

「……ツッコむ相手がないからスベッちまつたじゃねえか。ま、いつか。じゃ、そろそろやるか？」

そう言つと俺は、右手に5本、左手に5本の計10本の白刃煌めく、まるでブーメランのような形状をした短剣 ククリナイフをどこからともなく出現させると、手の上のククリナイフに魔力を注ぐ。すると10本のククリナイフは宙に浮き、俺の背後でクルクルと回転しながら佇む形となつた。

「 いっちはんの準備は出来たぜ。…… わあ、踊りましょつか！」

そう言つと俺はゴブリンの群れの一 角に突っ込んだ。ククリナイフも俺にぴったりくつつくようについてくる。

俺は右手で銃の形を作り、そして前方に向かつて1回だけ撃つ（フリをする）。すると宙に浮くククリナイフの一本が指を向けた方向に直線上に飛んでいった。ククリナイフが描くは、ブーメランの軌跡。とは少し違うもの。ククリナイフはおよそ50メートル先で急角度のリターンをしたかと思うと、俺の元に返ってきた。もちろん、その白刃を回転させたままに。

今のでさつと20体くらいのゴブリンにダメージを与えられただろ。しかし奴らはこんな攻撃1回で死ぬよくなタマじやない。でも、大丈夫。今のは前菜の中の1枚のキヤベツでしかない。前菜を彩るのは、これからなのだ。

左手も銃の形を取る。そして俺は前方に両手の人差し指を向け、無尽蔵に撃ち放った。

「ハツ裂きにしてやるぜーーー！」

ちなみにこんなことをしても俺に隙が出来る」とはない。一見、ククリナイフは乱射されているように見えるが、ナイフとナイフの間は何気に等間隔なのだ。これにより、10本目のナイフが撃ち出されても、すぐさま1本目のナイフが俺の元へ戻ってくるという仕組みが出来上がる。そんなこんなで40体くらい倒したとき、俺は気付いた。

「 芸が無えな……」

なので俺は、ククリナイフでいろんな技をやってのけることじた。

まずククリナイフ10本全てが戻つてくるのを待つ。そしてしばらく時間を取つた後、右手で一度だけ撃つた。すると10本のククリナイフ全てが一斉に人差し指の向けた方向へ刃を回転させながら飛んでいった。

俗に言つ『溜め撃ち』と同じ類の技だ。範囲は狭まり、隙も出来るのだが、その分与える総ダメージ量が大きく上がる。しかし溜め撃ちは従来、群れを成さない大型モンスターなどに使うものだ。こんな大群に囲まれている最中に溜め撃ちなんてモンを使うのはバカかルーキーか余俺かであろう。だけど勘違いしないで欲しい。俺はルーキーではあるがバカではない。しかも俺はルーキーではあるが、本来の『溜め撃ち』の使いどころはしつかり把握している。俺が『溜め撃ち』を使った理由は簡単。コイツらのこと、ナメてるからだ。一方に集中してたら、他のゴブリン共が俺めがけてバットのような岩の塊を振り上げながら飛びかかつて来やがつた。俺はそれをサイドロールでかわす。

「ハハッ、お前らもそこまでバカじゃないってことか」

という訳で、今度は全体に行き渡るような攻撃を仕掛けることにした。

右手の銃の形を解き、左斜めに真っ直ぐ伸ばす。そして体に勢いをつけ、右足を軸とし、その場で右回りに1回転する。すると、10本全てのククリナイフが俺を等間隔で囲んだ。正確には、俺を中心として等間隔に配置された、と言つた方が正しいか。そして俺は右手を頭上に掲げると、パチンと指を鳴らす。その音と共に、ククリナイフは俺から離れるように一直線にそれぞれの方向へ飛んでいった。

ちなみに俺はこの技を『十方射陣』じっぽうしゃじんと呼んでいる。が、名前を付けたはいいが、口に出したことはほとんどないんだがな。十方射陣を数回繰り返した結果、30体くらいのゴブリンがお亡くなりにな

つた。

俺は10本全てのククリナイフが戻つてくると、倒したゴブリンの数を頭の中で計算してみた。えーっと、最初の乱射で40体、溜め撃ちで20体、十方射陣で30体。……ということは、残り10体か。

俺の頭に残りのゴブリンの数が浮かんだとき、その残り10体のゴブリンが前方から突っ込んで来た。俺はそれを跳躍で回避。何処かの国の赤い配管工よろしくのジャンプ力を見せつけ、奴らの背後にまわった。

「アハハ、おめでとさん。よくぞ100分の10、いや、10分の1の確率を生き残れたな。そんなお前らには、ククリナイフじやない殺し方にしてやろう。」

俺はそう言つてククリナイフを手の中に収めると、10本全てのククリナイフは積もつた灰のようになくなつて空氣中に溶け込んでいった。

代わりに俺が出現させた武器は、2振りの剣。『テグハ』という種類の片手剣だ。この剣の最大の特徴、それは、大きく反り返った剣身であろう。しかし先程のククリナイフのような急カーブではなく、バナナのような緩やかなカーブを持ち合せている。それが2振り、つまり2刀流だ。

ちなみに俺のテグハは何故か剣身が黄色い。が、気に入たら負けだ。

俺が1対のテグハを出現させたと同時にゴブリン共は再び突っ込んで来やがつた。それに応じるように、俺は奴らに電光石火の如く突貫する。テグハを持った両腕をクロスさせたまま。そして俺とゴブリン共との距離がほぼゼロに達した時、俺は両腕を大きく振り払つた。

2本の剣が描く、<sup>エックス</sup>Xの文字。それを真正面からくらつたゴブリン

は5体。

「残り5体、か。  
一気に決めるか。」

そう呟いた俺はゴブリン共に近づいていった。そんなゴブリン共も、戦闘体勢に入る。

全く、コイツらに恐怖心というモンは無いのかねえ。

そう思つてみると、5体のゴブリンの内、4体がまたもや突っ込んで来た。前言撤回。コイツら無謀で無知なだけだわ。

俺はその4体を仲良く一斉に弔つてやった。

「…残り1体。  
さしづめ、『ラストゴブリン』つてとこか。」

俺がしようもないことを言つてる内に、そのラストゴブリンはまたもや、またもや突っ込んで来た。つーかコイツら突っ込んで来ることしか出来ないの？

そう思いながら俺は奴の攻撃をかわすように、跳んだ。その高さ、10メートル以上。そして呆気に取られているラストゴブリンに対して俺は、

「G o · t o · h e a v e e e e n ! !  
(安・らかに・眠れえええ！！)」

右手のテグハを振るい落とした。

上空10メートル以上からの振るい落とした。ゴブリンなんかが防げる筈が無い。案の定、ラストゴブリンの体は俺の剣撃で縦に2つに割れていた。

「終わったか。結構他愛無えな

そう呟きながら、俺『ゴウ・デイビス』は両手のテグハをしま  
うと、今は死体さえも蒸発して消えていったゴブリン共と戦つた廢  
村を後にした。

……あと今一ノリでも『ゴウ・デイビスだつて！ ダッセー』と  
か思つた奴ら、後で職員室に来なさい。俺が直々にありがたい説教  
と愛の制裁を加えてやる。

## Chapter 1 : episode 1 (banana side) ; 無題

はい！

いかがだつたでしょうか！？

え？

英語のところが合つてなかつたつて？

そ、そこは…

痛いところです。

まあ、何はともあれ、

皆さんからの感想、レビューなどを、グググ書いて下さい。

お願いします。

待つてます！

## Chapter 1 : episode 2 (banana side) . #

前回のあらすじ

バカが派手にバーベン100体を葬った。

「『ウ、もう帰つて来たのか！？』

俺がギルドに戻るなり声をかけてきた人物、コイツがこの街『ビギノス』にあるギルド支部のリーダー、『マイケル』である。

「おう、マイケル。チヨロイクエストだつたぜ」

「チ、チヨロいつてお前、相手はゴブリン100体だつたんだろ！？ それをお前、パーティ組んで無いクセに普通の奴らよりずっと早いんですけど！！」

マイケルの野太い声に反応してか、周りの連中も声を上げてきた。

「ゴブリン100体を1人で……！？」

「しかもアイツ、さつき出発したばかりだつたよな！？」

「に、人間技じや無え！ こ、これが……」

最後の奴が呼吸を置き、さつきよりも大きな声で、俺のダッサイ2つ名を呼んだ。

「これが、『バナナ爆風』の力なのか！？』

「ブッ！－！」

……自分の2つ名なのに、俺は飲んでた水を吹き出しそうになってしまった。

『バナナ爆風』、これが俺の2つ名。『爆風』の由来ならまだ分かる。自分で言つのもなんだが、おそらく俺の強さと派手な戦い方、そして半年でこんな強さにまで至つた俺の成長力から来ているのだ

う。だけど、『バナナ』って何よ？ 何で果物？ 確かに俺はバナナ大好き人間だ。バナナ主義だ。だけど、バナナが好きつて理由で2つ名になるか？ ジャ、何だ？ この腰まで伸びた金髪を項のところで1つに束ねているからか？ 確かに髪がいい感じに纏まってる様、バナナの如しだが……とりあえず、この場を借りて叫ばせて貰う。この2つ名付けた奴どんだけネーミングセンス無えんだあああああああ！！

「そりいえばさあ、」

と、ここにウエイトレスのねーちゃんが俺に直接話しかけてきた。

「『バナナ爆風』の君と『アップル暴風』って、どっちが強いの？」

『アップル暴風』。

俺と同じくギルド内で期待のルーキーとして名を馳せている人物だ。戦闘力は俺と互角くらいで、キャラリアも俺と同じくらいらしいというのは、まだ俺と『アップル暴風』が一度もエンカウントしてないからだ。故に『アップル暴風』の情報は風の噂でしかない。だからこそ、俺は思つ。

「さてね。出来れば、1回手合わせ願いたいものだけど」

それに続けて『アップル暴風』つてこれまたセンス無えな、と咳きながら黄色い長袖のレザージャケットを脱ぎ、近くにある椅子に掛けると、俺もそれに腰かける。そしてそのままウエイトレスのねーちゃんにランチをオーダーした。

余談だが、こここのギルドは軽食屋も兼ねているからランチにはもつてこいなのだ。ランチだけでなく、朝、昼、夜、全てにおいて饭食わせて貰つてる。因みに白い半袖シャツに黒いズボンという出で

立ちでカレーなんてモンをオーダーしたから、ウエイトレスのねーちゃんに若干『コイツバカか?』的な目で見られたことは秘密だぞつ!

……あ、ここで引かないでくれる? ジョークだよ、ジョーク。

「やつ!」

「……どうした?」

俺がスペースの効いたそれを一人で食つてると、何か爽やかなオーラを出しまくっているナイスガイな青年が俺の向かい側に座つてきた。

「君は噂によると果てしなく強いらしいじゃないか

「……まあな

「でも、キャリアはあまり無い

「……否定はしねえわ

挨拶に次いで出てきた言葉がそれだ。何だコイツ。

「そこ」でだ。僕が君の質問に答えようと思つた

と思つたが、結局コイツはいに奴らしい。

「お、ご親切に」どうも

「どう致しまして。それで何か質問はあるかい?」

ナイスガイな青年はそつきたので、俺はまずは、と、基本的な質問をした。つーか挨拶の次には普通これを持つてくるだろ。

「……名前

「ん?」

「だから、アンタの名前」

「あ、ああ。自己紹介がまだだつたね」

ナイスガイな青年はうなずいて、自身の胸に手を置いて名乗った。

「僕の名前は『ファンス』だ。よろしく！」

「『ファンス』、ね。中々いい名前じゃねえか」

軽く誉めて、さっさと次の質問に移る。

「……『アップル暴風』って何者だ？　上手く強いつことだけは聞いてるんだが」

するとファンスの口から飛び出してきた言葉に、俺は少し驚いて変な声を出してしまった。

「彼女のことについて知りたいのかい？」

「ほえ！？　『アップル暴風』って女なのか？」

「うん。しかも、歳も君とあまり変わらなかつたよ」

ホントに驚いた。

まさか『アップル暴風』が俺と同じ年くらいの女とは思つてもみなかつた。

しかしそこから後のファンスペティアは、俺の知つてゐことばかりだったので割愛させて頂く。

「『』め～ん、失敗しちやつた～

『アップル暴風』についての質問が終わつた頃、そんな落胆の声が聞こえた。

その声の主は、15歳くらいの少女だった。後ろには仲間かと思われる15歳くらいの少女が2人。全員軽く武装しているので、このギルドの一員だといふことが分かる。

「おうおひ、ひりした？」

マイケルがすかさずカウンターに回る。

「聞いての通り、クエストに失敗しちゃったのよ」

そして彼女はマイケルにクエストの報告をした。

「……なるほど。意外と難しい場所だったみたいだな」

話を聞き終えたマイケルが頷いていたが、カウンターから離れたテーブルにいる俺には話の内容までは聞き取れなかつた。

「ゴウ！ ちょっと来い！」

突然マイケルに呼ばれた俺は、言われるままカウンターへと足を運んだ。ついでファンスよ、何故お前までついてくる？

「……ゴウ、お前今日の午後空いてるか？」

「いや、午後はマンガ喫茶行くから……」

「そうか、空いてるのか。丁度良かつた」

「いや、人の話聞けつて……」

「ゴウ、コイツらと一緒にクエスト行ってこい。」「

「あ！？ ふざけんな！ ついで俺が

「か弱い淑女レディを救うのが、紳士ジェントルマンの役目だらう？」

「知・る・か！？ ンなモン！！」

「リーダー命令だ。行つてこい。」

「俺、フリーだもんね！　どこの支部にも属していないもんね！　だからリーダー命令なんか関係無いもんね！」

「たとえフリーだらうと何だらうと、その支部に世話をなつてゐる限り、リーダー命令は有効なんだよ

「んな……！？」

D a m n i t ! ! (畜生 ! ! ) コイツ、何氣に口強え！

……と、いうワケで、俺は渋々プライベートタイムを潰して、この女の子3人のパーティに一時的に加わることに。………… S h i t ! ! (クソッ ! ! ) つーかマイケルの野郎、何勝ち誇った面してやがるんだ。やめろ、腹立つ。

俺が渋々クエスト参加の手続きをし終わった時、

「待つてくれ。そのクエスト、僕も参加するよっ！」

俺の背後から爽やかな声がした。何と、ファンスもこのクエストに参加したいらしい。

「マイケル、僕も参加していいよね。」

「あ、ああ。それは構わないと思うが……」

そしてファンスはマイケルの言葉を聞くなり、慣れた手つきでクエスト参加の手続きを済ませてしまった。

ということは……

「俺、抜けた！」

俺がクエストに参加する理由が無くなつた、ということでは！？  
おそらくあの三人娘は男手が欲しかったのだろう。しかし、ファン

ンスが参加したこと、男手が補充された訳だ。そしたら俺は晴れていらない子となるのでは！？

「いや、「ゴウは強制参加だ」

……マイケルコノヤロウ。

俺は基本的に1人でやつてきた。そんな俺が5人パーティなんて、疲れるだけだと思うのだが。

俺がそんなことを考えていると、ファンスが無言で俺に近寄つて来た。

「……どうした？」

「ゴウ、だつたよね？」

「ああ、合つてるよ」

「さつき言い忘れてたことがあつてね」

「……何？」

するとファンスの口が俺の耳元に近付き、呟いた。

「あんまり調子に乗るんじゃないぞ、餓鬼が」ガキ

そして静かにはなれると、再び爽やかオーラを放つ。

「お互い頑張りつー！」

そう言い残してファンスは例の女の子パーティの中へと入つていった。

残された俺が思つたことは、これだ。ファンスつて、嫉妬キャラだつたの？ 嫉妬キャラは今までに何人もいたけど、ファンスよ、お前もか？ ああ、もう、帰りたい……

まあ、帰る場所って言つても、ギルドかホテルなんだけど。  
その日の午後、俺は強制的にクエストに参加させられたのであつ  
た。

## Chapter 1 : episode 2 (banana side) . #

はい。今回少しグダグダでしたね。

アクション一つも入つてないし。

ゴウくんには次回で暴れまわって貰いましょうかねえ。

♪ 次回予告（嘘）♪

「ゴウさん、髪の毛ながいですね。どんなリンス使っているんですか？」

「パ〇テーン」

「期待！」（だから嘘だつて）

はじめ

遅れて申し訳ありませんでした！――

理由は多々あるとはこゝれ、その中で『山の墜落』といつ理由が入っているのは事実。

今度からは出来るだけ早く仕上げたいと思つます！――  
少なくとも、遅れそうなときは、あらすじ部分に書き込んでおきます！

本当に、すみませんでした！

前回のあらすじ

「コウモリ、無理やりパーティを組まされ、クエストへ。

『テミタス』、それがこの世界の名前だ。

早い話、ここは剣と魔法のRPG的な世界である。

俺は3年前に、ひょんなことで日本からこの世界に来た。不本意ながらも、な。

最初は不安だったさ。言葉はちゃんと通じるのか、とか。でも、何かいろいろと補正がかかってたみたいで。

こっちの言語で相手に話したら、相手の耳には俺がテミタスの言語で話しているように聞こえるらしい。んで、その逆も然り、と。文字も、書かれていることが翻訳されて見える。ま、古代文字とかは無理だけど。つまり、俺にはいつの間にか自動翻訳機が搭載されたらしい。この自動翻訳機のお陰か、テミタスはテミタスでそれなりに住みやすい。

……え？

何でいきなりこんな話になつたかって？ 答えは簡単。俺、スゲ工暇。

俺たちは今、馬車でヤタ遺跡つていう場所に向かっている。クエストをこなす為に。因みに今回のクエストはというと……ズバリ、<sup>トランジャー</sup>宝探し。だけど、俺以外みんな絶賛爆睡中である。

うーん、何しよ。

俺がそう思い悩むと、向かいの席から声が飛んできた。

「……わざから暇そうだな」

俺に話しかけてきたこの人物、例の女の子3人組の1人だ。確か、リリアンとかいう名前だったような。

「まあな。てか、アンタ起きてたの？」

「起きてたら悪いか？」

「いや、そういうワケじや無いんだけど……  
……つーかマジで暇なんだけど。 どうにかして」

俺がリリアンに要求 といつよりムチャ振り すると、彼女は手を前に翳したかと思つと、何処からともなく細剣を出現させた。そして、そのフルーレの剣身を布で丁寧に拭く。

「だつたら武器の手入れでもしてみたらどうだ?」

リリアンの提案通り、俺も自分の武器の手入れをする」と。  
んじゃ、とりあえずコレからかな。

そう思つて俺が出現させたのは、2本のかなり湾曲した片手剣。  
2本合わせてその名も『双騎当千』。俺命名。黄色い刃が今日も美しい。俺はさつたと手入れし終わると、双騎当千をしまつた。余談だけど、やはり黄色いテグハつて、この2本だけのようだ。

はい、お次はコレ。俺が飛び道具として使つてる、10本のブームラン形の短剣。<sup>クリナイフ</sup> 10本合わせてその名も『十刃十色』。これも俺命名。コレもまたさつと同じようにちやつちやと手入れしてしまつ。

はい、ラストにコレ。

うわ、いつ見てもデケー。

ど、思わずにはいられないのがこの武器。大鎧『孤無双』。元は『テトラ・スペクティア・うんたらかんたら……』つて名前だつたんだけど長くて覚えにくかったから、俺が勝手に名付けた。

コイツは俺が4ヶ月前に見つけてギルド本部に送つた物だ。んで、2ヶ月前にコイツの調査が終わつてお蔵入りされそうになつたところを、俺が譲つてくれつて頼んで、貰つた。

貰えるものは貰つ。日本にいた時から変わらなかつた俺の精神の1つだ。時には他人から”Greedy(卑しい)”と言われたと

きもあつたが、俺はそれに対して”M o t t a i n a i（勿体無い）”と反論していた。

ようやく武器の手入れが終わった。と、そこで初めてリリアンがわざわざからこひちの方ガン見することに気付く。どしたの？

「……随分持っているな。これらは全部お前が使うのか？」

「ん、ああ。もちろん」

俺の返事を聞くと、リリアンの顔には驚きを表す表情が現れる。その時、俺は思い出した。この世界では、武器は1人につき1種類がセオリーであることを。

「……驚いた？」

「当たり前だ……」

……改めて思う。

俺つて、結構変わってんのな。

……とまあ、そんなこんなで、ヤタ遺跡にご到着しました。  
なにこれ超広い。あとかなり天井高い。でもまあ、それだけであつ

た。これといった障害物も罠も無い。強いて言つなら、たまにゴブリンが5、6体まとめて襲つて来るだけ。

因みに俺は一人で後ろを担当している。後ろからの奇襲を防ぐためだ。

でも、そんなことはあまり無かつたから、実質サボりに近かつた。はい、さつきほどじや無いけど、暇つす。

という訳で、前方担当の4人の戦いぶりをレポートしたいと思いま～す。

はい、相手はゴブリン6体。

「ヤツ、ハア！」

開始早々、いきなりゴブリンに殴りかかったのは、女の子3人組のリーダー、アリシア。左ジャブから右アッパーに繋げ、ゴブリンを打ち上げる。打ち上げられたゴブリンは空中で受け身がとれず、そのまま地面に落下。直後、倒れたゴブリンに追い打つよつこ、

「ハアアア！！」

アリシアの渾身の<sup>かかとおどし</sup>踵落としが炸裂した。これであと5体。

「ハツ、セイ、ヤア！」

アリシアが踵落としをぶちかますと同時に、リリアンも前に出た。フルーレでゴブリンの体力をじわじわ減らし、攻撃が来たら避ける。まさにヒット＆アウエイだ。しかし度々避け損ねるときもある。そんなどきは、

「だ、大丈夫！？ 今治すから！」

フェイが回復魔法を詠唱し、リリアンを回復させるのであった。  
あ、フェイってのは例の女の子3人組の1人ね。

「すまないな、フェイ。さて、一気にいくぞ！」

リリアンは回復してもらうと、ゴブリン1体にラッシュを繰り出した。華麗なステップで繰り出される1-5連撃によつて、そのゴブリンは消滅。残り4体。

……いや、残り2体だ。

「ロック・フォール！！」

フェイのおつとりした声が響くと、ゴブリンの頭上から人を2人程潰せそうな大きさの岩石が降ってきた。どうやらリリアンがラッシュ決めてる間に、フェイは魔法の詠唱を始めていたらしい。はい、改めて言おう。残り2体です。

「行くよ！ フツ、セツ、トリヤ、ハアッ！」

さて、残り2体のうちの1体にビシビシ矢を放つてるのは、ナイスガイ腹黒夫のファンス。

「貫け！…」

そしてその1体に止めをさす。そのゴブリンが消滅する中、もう1体のゴブリンがファンスに突っ込んできた。だが、

「甘いよ…」

バックステップで楽々回避。そのとき、

「セイヤツ！」

接近したアリシアが隙が出来たゴブリンにサマーソルトをかました。打ち上げられるゴブリン。その落下途中、

「これで、決まりイー！」

アリシアのアップバーがクリティカルヒットし、ゴブリンは蒸気となり、消滅した。はい、という訳で、此方の4人の勝ち。お疲れ様でした。

「ハツハハー、やるじゃない！」

戦いが終わった直後、俺が賞賛の言葉をかける。その後俺、何て言われたと思う？

サボつてないで手伝え、だとさ。

「こ、こんなに……！？」  
「も、もう、ダメー……」

説明しよう。入口から大体1キロの距離を歩き、遂に後少しで宝のある所に着く、というのに、前方にゴブリンが15体ほど現れた。……ゴブリンと戦いながら1キロほど歩いたのだ。俺以外の4人には少し疲労の色が見え始めている。

「奮起しろ。ここが正念場だぞ」

「……いや、お前らは休んどけ。俺がやる」

リリアン といふか他のメンバーも、休むつて言葉、知らなさそうだったので、俺は4人に休むように促した。

「し、しかし……」

「俺に任せな。それに俺も、このままサボり扱いされたく無えしなチツ、調子に乗りやがつて……」

リリアンの言葉を適當な理由で遮る。

後、何かファンスが俺だけに聞こえる声でほざいてたが、スルーします。

「ふう……じゃ、やりますか。」

俺は肺に溜まつたモヤッとした空気を吐き出し、2本のテグハ『双騎当千』を出現させた。そしてゴブリン共の方を向き、一言。

「サボった分の名誉挽回に、テメエ等をヅツ殺しまーす！」

その言葉を合図に、ゴブリン対俺の戦いが始まった。まあ、宣言通りすぐに終わると思うけどね。

早速5体ずつ計10体ほど突っ込んで来た。前方の5体の攻撃を

受ける前に俺の一閃が放たれ、その5体は無様に消滅。

後の5体の攻撃はジャンプで回避したあと、空中で『双騎当十』から大鎧『孤無双』に武器をチエンジ。そして空中から

「ハアッ！」

思い切り振り下ろす。

ありとあらゆる力が働き、急速に落下。そして真下にいた5体のゴブリンを潰す。

「残り5体、か。」

俺はそう呟きながら、武器を『孤無双』からククリナイフ『十刃十色』にチエンジした。もちろん即座に10本全部を浮かせる。右手をゆっくり敵の標準に合わせ、

「消え失せろー！」

チャージショットを放った。

固まつてたゴブリン5体は10本まとめて襲つて来たククリナイフにどうすることも出来ず、1体残らずまともにくらい、消滅していった。

まあ、そんなこんなで俺が圧勝したのだが、

「…………」「…………」「…………」「…………」「…………」

はい、4人ともこつちガン見します。

……どしたの？

「む……無傷……！？」

「しかしも……こんなに早く終わるとほ……!?」

暫く続いた沈黙はアリシアとリリアンの声で破られた。その声で俺は沈黙の意味を理解する。

「す、す、い、い、す、す、よ、よ、！、！」

۱۵۹۷-!-؟

そのときだつた。……何故かフエイが俺に抱き付いて来たのは、

「フェイ！」

ほえ？ 私の名前覚えてくれたんですか！？ 嬉しい！」

と  
取りあえず俺かに離れてくれ！」

「この世界では、抱きつくることがスキンシップの一種となることが  
ある。おそらくフェイはそのつもりで抱きついているのだろう。が、  
元々日本人である俺はこのスキンシップにドキドキせざるを得ない。  
老若男女関わらずこのスキンシップは数回程受けてきたが、どうし  
ても慣れん。

まあ、そんなこんなでフエイを引き剥がした後、ちやつちやと進み、そして遂に、

「コレが宝か？」

たからのお宝の間に着いた。んで、その宝どこへゆくのさ……

「土器、か。」

ファンスの言う通り、土器である。因みに女の子3人組は以前のクエストで此処まで攻略してたらしい。

……でも、此処まで来れば後はコイツを持ち帰るだけだから、さほど難しいクエストじゃ無いよな。何処が難しいんだ？  
俺はそんな疑問をアリシアにぶつけてみた。返つて来た答えは、

「……触つてみて。すぐに分かるから」

アリシアに言われるまま、俺は何百、何千もの年月を重ね続けた物だけが持つ雰囲気を醸し出しているその土器を手に取つてみた。刹那。

その土器が突如黄色い光の帯を纏つたかと思うと、続いて遺跡の壁、床一面に土器が纏つた物と同じ光の帯が広がつていった。よく見るとその光の帯には、何やら古代文字のような物が刻まれている。そして、遺跡全体が揺れるかのような音が響く。

そのときだつた。

壁が、地面から生えたのは。

幾つも生える壁。そして壁は、幾重にも組み合わされていく。

「な、何だ、コレは…？」

ファンスが声を上げる間にも、壁は組み合わされていく。そして、幾重もの壁が形成したのは

「成程な。アンタらが難しつて言つてた意味がわかつたよ」

迷宮であった。  
ラビリンス



## Chapter 1 : episode 3 (banana side) · 檀

今の自分が言つのも何ですが、評価、感想など、ドンドン書き込んで下さい！  
お願いします！！

### 次回予告（嘘）

「ウツフヒイとの愛の花道、それを阻む者はー！？」  
期待！  
(だから嘘だつて)

『前回のあいすじ』は、今回を持ちまして終了させて頂きます。

理由ですか？

それはただ一つ…！

…ダルいから。

ゲブッ！

ちょ！

石投げないで！

お、お前、止める！

デザートイーグルは死ぬから！

つて

ギヤアアアア…！…！

何でこのクエストをあの3人娘が『難しい』って言ってるかがよく分かつた。簡単に言うと、この迷宮<sup>ラビリンス</sup>、難易度がクソ高いのだ。いや、一目見りやあ分かるし、フェイが飛びつきながら訴えてきたから、ね。

因みにあの土器を台座に戻すと、迷宮は無くなるらしい。でも今回のクエストはあくまで宝探しだ。<sup>トレジャー</sup>この土器持つて帰らんと意味無いやん。

「……ファンス、何かいい案ないか？　迷宮の簡単な攻略の仕方とか」

一応ファンスに何かいいアイデアがないか訊いてみる。案の定、返答は予想通りのものだった。

「残念だけど、持つて無いね  
「んー……」

迷宮の攻略は無理、か。仕方無い。

「……アレ、やるか  
「アレつて？」  
「まあ見てなつて」

俺は顔にハテナマーク付けたようなフェイを一瞥すると、大鎧<sup>ウルフ</sup>『孤無双』を手に取った。その瞬間、

「ふえ！？」

「なー?」

「ゴウ君!?

「ま、まさか!?

察しのいい4人から驚きの声が発せられる。あ、因みに上からフエイ、リリアン、アリシア、ファンスの順ね。

俺は4人の声を無視。意識を集中させるためだ。足を肩幅程度に開き……

はい、簡単に言いましょう。孤無双をクラブの代わりにして、ゴルフの構えとつてます。詳しく言つと、ドライバーで遠くにブツ飛ばす構えで。

構えをとると、孤無双に魔力を込める。3秒くらいの間、魔力を込め、大きく一呼吸。

そして……

「テエイアアアア!!」

クリティカルショット!

これ、ただの素振りじゃね? と、思う人もいるだろ?。だが、違う。

孤無双が、本来ならばそこに球があるであろうどこうどこうまで振られたときだつた。

孤無双”自体”から、バスケットボール並の大きさの魔力弾が放たれたのは。

まるでそこに最初から球があつたかのように。

その魔力弾は一直線に飛んでいき、迷宮を構成する幾重もの壁を、破壊し、破壊し、破壊した。魔力弾の弾道は、そのまま1本の道となつた。

「「「」」」

暫くの沈黙。それを破つたのも、

「あー、やつぱスッキリするわ、コレ」

俺だつた。

卷之三

4人が見事なくらいのハモリで驚愕をそのまま表現した声を上げる。そしてそのままフェイからのハグと3人からの質問責めに会うことにして。

「い、今、何!?」  
「ど、どうやつたんだい!?」  
「わ、ワケが分からん!!」  
「はう~、凄い!!」

あっはは～、收集つきません。

つーかフヨイはさつきから何なんだろう？ ヤケに抱きついて来るやがるし……まさかコイツ、俺に惚れたってことは……無いな。絶対。だってよ、俺ら知り合ってまだちょっとしか経っていないし、ねえ。

## 取りあえず閑話休題。

「……ありや？」

さてさて、俺ら一行は先ほど出来た道を通りてゐるのだが。先頭を行つていたアリシアが突然妙な声を上げる。

「あんらまあ

続いて妙な声を出したのは、俺。コイツは意外だつた。俺は多分皆もそうだと思うが、てつ生きりこの遺跡全体が迷宮化したのかと思っていたのだが、そうでは無かつた。

俺らの前の景色は、行きのときと同じような感じだつた。特に何もない。変わつた所と言えば、床と壁に例の光の帯が書かれているだけだつた。

そのとき、アリシアが何かを見つけたようだ。

「あれ？ あんな石像、行くときにもあつたけ？」

……石像？

俺も疑問に思い、アリシアが見ている方向を見てみる。

「ありや、あんな所にあつたか？」

「……一応、あつたぞ」

俺が声を上げると、リリアンが反応。ビツヤラ氣付いてたのはリアンだけだつたらしい。さらヒリリアンは続ける。

「まあ、行くときにはあんな光の帶など、刻まれてはいなかつたがな」

「おおつと、これは……  
リリアンのその言葉で、俺は誰よりも早く意味を理解した。迷宮化されていない場所と石像の意味を。  
簡単に言つと、

「……ボス戦ですね。 分かります」

俺が1人でそう呟いたのと同時に、ゴーレムその石像は動き始めた。

「ひやあ！？」  
「！」  
「これは！？」  
「まさか……！？」  
「ゴーレム！？」

つーかお前ら気付くの遅いわ。いや、俺が早かつたのか……？  
まあ、どちらでもいいけど。……つーかさ、

「リリアン、ゴーレムってそんな強いん？」

俺は、この仕事始めてからまだ半年しか経っていない。つまり、どの魔物が強いとかそういうのはよく分からんのだ。

「な、知らんのか！？ 数ある魔物の中でもAランクを誇る魔物だぞ！！」

なんか強いらしい。その後も何かごちゃごちゃ説明された。内容を要約するところだ。昔の大魔術師が作り上げたもので、主にそれ

なりに栄えていた古代文明の遺跡にしか出現しない、強くてレアな大魔物。

デメリットは起動するまで少々時間がかかるという点。現に今も、少し動いただけで特に目立つた動きは無い。

しかし、敵と認識した者を地の果てまで追いかけるといふ、はた迷惑な機能付だ。

余談だが、魔物にはランクというものが付けられている。が今は2つだけ覚えていればいい。

Aランク。コイツ等は俗に言つボスの位だ。ゴーレムの他に、竜もこのランクに入るらしい。

Cランク。コイツ等は所謂雑魚。因みにゴブリンは単体ならこれより1つ下のランク、つまりDランクにあたるのだが、群れをなす習性の為、Cランクに認定された。

……と、無駄話はこれくらいにする。もっと詳しく聞きたい人は職員室まで来なさい。美味しいバナナスイーツと共に懇切丁寧に教えてやろう。

取り敢えず、今やるべきことは、

「下がつてな。ここは俺がやる」

このゴーレムおじいちゃんにバナナの良さを伝えることだ。肉体言語で。

「なーに、俺一人で十分だよ。だから、俺に任せな

俺の言葉を驚きながらも素直に聞き入れたアリシア、リリアン、フェイの3人はすぐさま下がる。そう、アリシア、リリアン、フェイの3人だけ。

ファンスは俺に歩み寄つて来るなり、いきなり俺の胸ぐらを掴んだ。

「！？」

「ひやつ！？」

「ファンさん！？」

驚く3人娘。しかしそんな3人には目もくれず、ファンスは俺に向かつて、

「テメエ……自惚れんなよ……！」

本性をさらけ出して、キレた。

ファンスの豹変ぶりに驚きと戸惑いを隠せない3人娘。しかしファンスはお構い無し。

「幾らテメエが強いつたって、あんなのに一人で勝てるワケが無いだろうが！」

ガクン、と俺の体を揺らす。そして一度吸気を取り込み、ファンスの口から出た言葉に、俺は驚かざるを得なかつた。

「テメエは何で協力しねえんだ！！ 1匹狼気取りか！？ だつたらそんな変なプライドなんか捨てちまえ！！」

驚愕と共に困惑する俺。しかしながら言葉は続く。

「もっと仲間を頼れよ！ そんなんじゃお前……、いつか、自滅しちまうぞ……！」

そう言い放つて、ファンスは俺を乱暴に解放する。  
しばしの沈黙。先程から俺の心の内は驚愕と困惑の念が渦巻いてばかりだ。

何故、ファンスの口からそんな言葉が出る？ ファンスは俺を目の敵にしているのではなかつたのか？

俺の疑問は深まるばかりだったが、それを解決したのはファンスの独白であった。

「……僕はお前に嫉妬していた。僅か半年で、あつという間に僕らを抜いてしまつたお前に」

でも、と、彼は言葉を続ける。

「それ以上に、憧れていた。人々から信頼され、仲間の危機に颶爽と現れ、救いの手を差し伸べる君に」

落ち着いてきたのか、ファンスは俺のことを『お前』ではなく『君』を使って表すようになった。……仲間の危機を云々かんぬんは多分噂に付いた尾鱗おひれであろうが。しかしこじで口を出す程俺は馬鹿ではない。

「僕にとって、君はヒーローなんだよ！ だから僕は、そんな君を目標にしたんだ！」

見れば、あの3人も、ファンスの言葉に聞き入っていた。

「だからー。こんなところで、君に自滅なんかして欲しくないんだよ……！」

何ということだろうか。ファンスは俺を妬みながらも、俺を目標にしているとまで言つてくれた。俺は知らない間に思わぬ人間から尊敬されていたのだ。

崩れ落ちるファンス。それと同時に、3人娘が俺の元に近寄ってきた。

「……私達も、憧れていたんだよ。ゴウ君、君に」

アリシアが、言葉を紡ぐ。一語ずつ、丁寧に。一語一語に、思いを乗せて。

「だから、お願い。君に、協力させて」

ああ、俺は、いつの間に人に尊敬される存在になつたのだろう。ファンスの言葉、アリシアの言葉。2つの思いが俺の心にじわりと染み渡る。

……だけど、

「悪いが、それは無理だ」

俺は、2人の思いを受け取らなかつた。

「な、何で！？」

というより、受け取れなかつた。受け取れたとしても、協力出来るのは、精々フェイくらいだ。もしかしたらアリシアも協力出来るかも知れないが。

「私達では、役不足だというのか！？」

アリシアに続いて、リリアンも食い下がってきた。  
正直、俺は皆の期待に応えてやりたかった。俺に協力させてやり  
かつたし、俺も協力したかった。  
しかし、

「……アイツ、石だぞ。剣とか弓矢とかって、アイツに効くの？」  
「……あ」

いち早く反応したファンス。どうやらファンス達はは熱くなりすぎて初步的なことを忘れていたらしい。

ここで今いる5人とゴーレムとの相性について考えてみよつ。  
まず俺。獲物云々の前に、俺はオールラウンダーだ。さらに体のスペックが人間やめましたレベルなので、ゴーレムに対する力を持ち合わせていない訳がない。

フェイ。彼女は魔法使いだ。ゴーレムに対抗出来る魔法の1つ位持ち合わせているだろう。

アリシア。己の拳を武器とする彼女にとつてそれなりに硬い相手とは相性抜群であろうが、ゴーレムは硬すぎる。殴り続けたら彼女の手の骨がおじyanになってしまいは日に見えていく。

リリアン。剣は剣でも両手剣などの叩き斬ることに主軸を置いた剣であつたら対抗出来ただろう。しかし彼女の獲物は細剣。ポツキリ折れるのがオチだ。

そしてファンス。最早何も言つまい。

以上のことから、対抗出来るのは俺と、もしかしたらフェイ。しかしアリシア、リリアン、ファンスの3人は望みを絶たれた訳ではない。『粉碎スキル』という物があるのだが、それを習得しているなら話は別だ。

「という訳で、アンタ等、粉碎スキル持つてる?」

「……持つてない」

「……アリシアと同じだ」

「……僕も」

残念だが、仕方ない。そう思いながらこの3人に戦力外通告を言い渡す。

ファンズが声を上げてうなだれるのと同時に、アリシアとリリアンもがっかりとしたような表情に。3人とも顔文字のような表情でうなだれている。ショボーンという効果音が聞こえてきそうだ。

「あ、あの、私は……」

そう訊いてきたのはフェイだ。この空気の中、よくぞそんなことを訊いてこれたものだ。

確かに、フェイは4人の中で唯一ゴーレムと戦える見込みがある。あるのだが、

「悪いけど、フェイも駄目だ」

「な、何でですか!? ゴーレムに対抗出来る魔法も持っているのに! !」

「もしここで戦闘に参加してみる。後で絶対『フェイちゃんだけずるーい!』って空気になるから。だから君も見学していなさい」

という訳で、ショボーン一人追加。結局俺一人で戦うことにして

「……ん?」

その時、何か鳴き声のようなものが聞こえた。ような気がした。

耳を澄ます。ギャー！ ギャー！ と、口元に来る途中にも聞いた鳴き声が。

「……チツ

その鳴き声の主は、どうやら此方に近付いているらしい。面倒なことになってきた。

煩わしい鳴き声が近づけば近づく程、俺の顔に皺が寄る。しかしそれと反比例して、後ろの4人から負の感情が消えていくのが分かる。……どうやら思いを無駄にすることは無くなつたようだ。

「ファンス、アリシア、リリアン、フュイ」

俺は4人の名を呼ぶ。そして、

「頼んだ」

アイツ等の思いを受け取り、俺の背中を預けた。

任されたのが余程嬉しかったのか、一気に表情が明るくなる4人。

「ああ！」

「まかせて！」

「分かったよ～！」

「心得た！」

そしてゴブリン達が姿を現し始めた。その数、30。

「行くぞ！」「

「おおッ！」「

「」

リリアンのかけ声と同時に、4人はゴブリンの群れに突っ込んでいった。

「あーらり、元氣があつて喜ばしいこつたい

そんな4人を俺は微笑ましい気持ちで見送り、

「……で、お前も準備OKか？」

ゴーレムの方に体を向ける。

するとゴーレムも徐々に体を動かし始める。完全に起動したようだ。

「……You are ready to die（……死ぬ覚悟は）」

俺は闘氣を剥き出しにし、

「aren't you（出来てんだろつなア）！？」

ゴーレムに向かつて駆け出していく。

次回予告一（嘘）

アリシア「みんな、  
ゴーレム体操、始めるよー！」

（N）期待！

## Chapter 1 : episode 5 (banana side) . バナナサイド

文体を少しだけ変えました。

これからは、段落（？）に や  
などを付けてい  
きたいと思います。

感想、アドバイス、レビューなど、ジャンジャン書き込んで下せ  
！ お願いします！

「ハツ！」

ゴーレムの腕が、足が、俺の行く手を阻むように繰り出される。その巨体を活かしたパンチやキックはかなり広範囲まで届くものだ。だが、攻撃を繰り出すスピードはそこまで速く無い。

「よし、ハハツー！」

俺はそんなとろい攻撃を避けながら接近し、がら空きになつた懐田<sup>ふとい</sup>掛けて跳ぶ。  
そして、

「よこしょオーーー！」

大鎧『孤無双』の豪快な一撃を放つ。  
流石相手は石。  
ブツ飛ばすことは出来なかつた。  
それでも、ダメージは確実に与えられただろ？  
それにしても、

「オイオイ……」

「ゴイツの攻撃には難ありだ。

「ファンス達に当たつたらビリするんだよ……」

「ゴイツの攻撃は、リークがクソ長い。

だから、ファンス達のところまで行き渡る可能性があるのだ。

そしてそのファンス達は『ブリン共との戦闘に気を惹かれている。そこにゴーレムの攻撃でも来てみる。

下手すりや一気に戦闘不能になるぞ……。

こりゃ、ファンス達に注意すべきだな。

「オイ、ファンスー・アリシアー・リリアンー・フヨイ！」

俺に向けられたゴーレムの攻撃。

俺はそれらを避けながら話を続ける。

「いいか？

俺は敵の攻撃は…」

ゴーレムが俺を踏みつけようとしたが、それも回避。踏みつけられたところが抉れ、石畳の一部が飛んでくる。ついでだからそれらを孤無双で打ち返す。

「基本的に避ける！

防御は苦手だからあんまりしない！」

今度は俺に向けて右ストレート。

これもサイドステップで回避。

「だからー。」

ゴーレムがすかさずロー・キックを放ってきたのでジャンプで避け、そこから空中で『ヒア・フロア』という無詠唱魔法を発動。

そこにある篭の無い壁を蹴るようにしてゴーレムに接近し、そこからさらに『ヒア・フロア』を発動。

これまたある筈の無い足場を蹴つてゴーレムの頭上まで来ると、

「だりあー。」

ゴーレムの脳天田掛けて孤無双を振り下ろした。  
しかし、やはり石相手に孤無双を地面まで振り下ろし切ることには出来なかつた。

俺は、ゴーレムの頭を足場にして後方に跳躍。  
ファンス達4人の近くに着地すると、

「自分の身体は自分で護れよ」

言いたいことを言い切つて、再びゴーレムに田を向けた。  
その時、何体かのゴブリンが俺田掛けて襲つてくるが、

「邪アアアアアアアー！！

左足を軸にした孤無双の360度の回転攻撃により、呆氣なく消滅した。

そのついでに、残りのゴブリンの数を数えてみる。

「お、残りは13か。

あともう一息だ、頑張れ」

「俺、何かマズいこと言つた?  
何でアンタら黙りしてんの?」

「いや……」

ん？

どうしたアリシア？

「その内の7体は、今ゴウ君が倒したんだけど……」

…マジでか？

でもまあ、

「あと13体いるんだ。

氣イ抜くなよ」

俺はまたゴーレムの方を向く。

…「コイツは驚きだ。

「ゴーレムって、魔法使えたのな」

ゴーレムの足元には魔法陣が展開されており、右手を此方の方に向けている。

その右手の先には、魔力が溜まりつつあった。

「ゴブリンは後だ！  
今はとにかくずらかれ！」

俺の言葉を合図に、5人共それぞれ別々にずらかった。

ゴーレムが必ずしも俺だけを狙つてくるといつワケでも無いからな。だから4人にも促したワケだが。さて、誰を狙う？

ふと、俺は「ゴーレムの右手の先 つまりゴーレムの狙いの先を

見てみた。

……俺じゃ無い。

アイツの右手は俺の方には向いていなかつた。  
ゴーレムの狙いは、フェイ。

「チツ、よつにもよつてフェイかよ……」

フェイは今回のパーティの中では一番遅い。  
加えて、運動神経も悪いから……

「ひょわつ！」

ほーら、「ケた。

それと同時に、ゴーレムは魔法の詠唱 ゴーレム喋れないけど  
が完了したらしい。

フェイにビームを放とうとする……ってウオオオオイ！！  
このままだとフェイは確実にお陀仏だ。

その図が頭に浮かんだ瞬間、フェイに向かつて一気に駆ける。

「そおおおい！！」

俺はタックルをかますよつた感じでフェイに抱き付くと、空中で反転し、俺が下に来るような感じで石畳に滑り込む。

間一髪、ビームの回避に成功した。

危なかつたゾエ～

「だ、大丈夫ですか～！？」

フェイの声が聞こえる。

「…そりゃ、こいつのセリフだ。  
ケガ無えか？」

そう言いながら状態を起こせなかつた。  
フェイが俺の上に跨つた状態であつたからだ。

「フェイ、そろそろ退いてくれ」

「ひやわっ！」

す、すみませーん！」

フェイが俺の上から退こつとする。

その時、見えた。

ゴーレムが足を半歩ほど下げ、今にも蹴りを放とうとしているのを。

「…！」

「…！」

「ふえー！？」

「…！」

「…！」

「…！」

とつやに手を取り、フェイを引き付けて再び抱きかかる。  
刹那、フェイの髪をゴーレムの左フックがかめる。

「…！」

危ねえなオイ！」

俺はフェイを退け、立ち上がる。

「あ、あの…」「  
なんすか？」

「ありがとう」ゼ 「礼ならギルドでたっぷり聞くから、せつねじアプロン倒しゃつて  
…はい」

こんなことだらうと思つた。

まあ、いいや。

俺がファンス達の方に目を向ける。

おーおー、何だ、善戦してんじやん。  
んじや、俺もうだうだしてらんねえな。

……少し、本気出すか。

そう思つたとき、ゴーレムが俺に踵落としを繰り出そつと、右足を  
上げていた。  
だが、

「隙だらけなんだよ！」

俺は今までよりも速いスピードで奴の近くまで接近し、

「ブツ飛べ！」

全体重が掛かつていて左足に会心の一撃をブチ込んだ。  
重心がブツ飛んだことにより、ゴーレムは転倒。

そこからはもう、ずっと俺のターン、スーパー・フルボツコタイムであつた。

そうして十数発かくらわした時、奴の胸部辺りにヒビが広がつたのが確認出来た。

それを見ると、孤無双に魔力を込め、そして、

「はい、お疲れ様でしたアー！」

とどめとして、ヒビの中心部目掛けて、一気に振り下ろした。直後、遺跡全体に”何か”が壊れる音が響いた。

俺達が無事ギルドに帰還した頃には、辺りはすっかり暗くなっていた。

いや、一応街の街灯がちらほら灯っていたけど。

「ひやー、じりじゃあ流石の俺でもビックリだ

そして今、俺達はマイケルに報告している最中である。

長年この街のギルドリーダーをしているマイケルでも、ゴーレムを1人で　しかも目立った外傷も作らずに　倒した奴に会つたことは無かつたらしい。

「アホ、お前はホントに……」

「…あのさ、俺のことはもうここから、さつとと宝預こかってくんね

？」

これ以上放つといたら話が進まなくなりそうだったので、俺が無理矢理話を元に戻した。

さて、報告も完了し、やっとクエストも終わり、俺は一人で夕食を取ろうとしているのだが…

「…………」

「さっきから俺の向かい側にアリシアが仁王立ちしてるんですけど。しかも何かガン見してきてるんすけど。…どしたの？」

「…………」

しかし、アリシアはただじつとこちらをガン見し続けている。このまま何もしないでいるのにも耐えられなくなつたので、さっさとメシ食つてしまおうと思い、メニュー欄を手に取る。その時、アリシアが動いた。

かと思うと、俺の手からメニュー欄が消えた。  
犯人は言わずもがな、アリシアだ。

「…何だよ」

こちとら腹減つてんだ。  
何してんすかこのアマ。

嫌がらせか？

などと思つたが、アリシアから出た言葉は意外なものだった？

「1人で食べてて美味しい？」

「ああ、そういうことか。

つまり、

「一緒に食べよ？」

「先に言われちまつた。

アリシアはさつさとあの3人のいるテーブルに着いていた。

何だつたんだアイツは…

まあ、こんなのもいいか。

俺は一息つくと立ち上がり、

「へいへい、今行くつーの」

咳きながら、夕食時の喧騒を搔き分けていった。

次回予告（今回はホントかも）

夜に、コウを待ち受けていたものとは

！？

4月29日・第5話の後書き（あのビーでもこい次回予告）を修正しました。  
何かスマソ m(ーー)m

「わ、私、あなたのことが好きです！」

いきなり何言い出すんすか。

はい、俺は今フュイに絶賛告白中です。

告白申といつても、俺がされている側なんだけどね。

「つ、付を合つて下しちゃー！」「

あ、噛んだ。

薄々そんな予感はしてたけど、まさかホントになるとはねえ。

.... 気持ちは嬉しい。 ジム、

「一めんなさ」

俺は眩べよつた、しかしよく響く声を出しながら頭を下げる。

俺が断つた理由は実に簡単。

俺は、旅人だ。

丁度半年前から旅をしている。

い内に街を出るつもりでいる。

そんな俺なんかと付き合つたら、どうなると悪いへ...

俺は別にそうなつてもいい。

だが、フェイはどうなる？

アイツには、アリシアとリリアンがいる。

ファンスやマイケルもいる。

……そんな大切な仲を、俺なんかのために捨てては駄目だ。  
そう思つたから、断つた。

……そうで無くても、断つてたが。

何故かって？

……すまんが、フェイを恋愛の対象として見ていかつた。  
ええ、そんだけです。

あと、やつきの理由も含めて、  
断つた。

そつ伝えるとフェイは、

「……そう…でしたか…」

力無くうなだれ、

「……なら、」

かと思つと、いきなりバツと顔を上げて、

「シネ」

そう呟き、何処からともなくリリアンのフルーレを取り出しこ

「つてウオオオオイーーー！」

何！？

どうしたフェイ！？

「取りあえず落ち着け！！」

そう言つてみたものの、フェイはお構い無しに襲いかかってきた。

ずっと叫びながらラッショ決め込んで来るフヨイ。

「だから、落ち着けって！」

適当に回避する俺、

ねシネ死ねシネ死ねシネ死ねシネ死ねシネ死ねシネ死ねシ  
ネ死ねシネ死ねシネ死ねシネ死ねシネ死ねシネ死ねシ  
ねシネ死ねシネ死ねシネ死ねシネ死ねシネ死ねシ  
ネ死ねシネ死ねシネ死ねシネ死ねシネ死ねシ  
ねシネ死ねシネ死ねシネ死ねシネ死ねシ  
ネ死ねシネ死ねシネ死ねシネ死ねシ  
ねシネ死ねシネ死ねシネ死ねシ  
ネ死ねシネ死ねシネ死ねシ  
ねシネ死ねシネ死ねシ  
」

プチーン。

俺の脳内で、何かがキレる音がした。

そう、分かっている。

だつてキレたのは、俺だから。

「落ち着け、つて」

俺は振り下ろされるフルーレを片手で握り、

そのまま、フェイの鳩尾に思い切り膝蹴りをいれた。  
崩れ落ちるフェイ。

「やがて死んでしまったんだ。

۱۵۰

ひとまず、落ち着いた。

かに思えた。

「ウホウホ」  
「キーキー」

「」「の声は……

「ウホ！」  
「キッ！」

……一つ言わせて下せご。

「アリシアさんコリアンさん、アンタ何してんすか！？」

見るとアリシアは何かウホウホ言いながら耳に胡瓜を入れようとしている。

そしてリリアンはキャーキャー言いながら鼻にマラカスを入れようとしている。

…ワケ分かんね。

刹那、

「ウホウホホーイー！」  
「キヤキヤキヤキヤースー！」

2人が襲いかかってきた。

俺はフェイの時のように慌てはせず、最初から冷静だった。

2人が距離を詰めてきた瞬間、

「ハツ！」

アリシアに右ストレートを、

「セイヤア！」

リリアンに回し蹴りをプレゼントしてやつた。

遙か彼方に吹っ飛んでいったお一方。

俺、そんなに強くやつて無えぞ…

しかし、俺は予想出来なかつた。

最大の惨事が襲来してくることを。

最大の惨事、それは…

「ゴウちゃん」

……オネエ言葉を使い、

「私を受け取つて〜」

……バニーガールの格好をしたマイケルが、大量に空から降つてきたことだ。

「う、うわああああああ〜！」

俺の悲鳴が、辺りに響いた。

「 という、夢を見たんだ」

時刻は朝の8時。

俺はファンスと一緒にキルで朝食を取っていた。

「…何と書つか、お疲れ様

ファンスは袁れみの田で見えてきていた。  
と、それ、

「おはよー、ジャム君

フュイが挨拶してきた。

「あ、ああ…」

「お、お早つ

あんな話の後なので、俺はさぞけいな感じでしか挨拶を返せなか  
つた。

「あ、あの、ゴウさん

ん、ビ、どうした?

「…少し、お時間よろしくですか?」

やつぱりヒュイの顔は、熟れたトマトのトマト赤かった。

「…マジですか…」

…俺、どうなつちまつだらくな



ついカツとなつてやつた。

今では反省してません。

グダグダ注意報を発令します！

あの後ですか？

ええ、予想通り告白してきましたよ。  
……丁重にお断りさせて頂きました。

俺が見た夢と同じやつ。

「やうですか……」

来るぞ……

「な、ひ、……」

来る……

「仕方あつませんね

来た！

……つて、あれ？

「お、怒らないのか？」

声をすすぼめて訊いてみる。

返答は……

「怒りませんよ。

だつて、「

彼女は呼吸を置くと、

「アラさんには罪は無いですもの」

そう言って、微笑んだ。

……良かった

てつくり、死ねシネラッシュがくるかと思つたわ

「……何か、ゴメンな」

「いえいえ、

逆にスッキリしましたよ～」

「…そりか

「では、私はこれで！」

走り去つていったフヨイ。

……何というか、悪いことしたな。

罪悪感が

……え？ 何故かつて？

……だつてさ、

アイツの目、煌めいてたから、

……濡れていたから……

「ガウ、少し話がある。

時間いいか?」

時は変わり、昼飯時、マイケルが話しかけてきた。  
……顔を赤くして。

「あー、俺はガチホモじゃ無いんでね。  
お断りさせて貰うわ」

「違つ!」

あれ、違つの?

「顔が赤いのは、キムチ食つたからだ!」

ああ、そういうことか。

つーかこの世界にキムチあつたのな。

それはそれで、ビックリだわ。

「……で、話つて?」

取りあえず訊いてみる。

するとマイケルは俺の耳に近付いてきた。

「いいか、よく聞け。

実は……」

俺は次の瞬間、マイケルの言葉に我が耳を疑つた。

「魔王が、復活する

「……は？」

俺はマイケルの言ったことを聞き間違えたのか？  
そう想い、マイケルに再度問い合わせ直すが、

「魔王が復活する」

返ってきた答えは先ほどと同じものだった。

「この街の広場に

オマケ付きてや。

「え？ 何？

魔王いるの？

つーか、いつ？

「明後日の夕方

「早えよ！――

明後日！？

何？ 馬鹿じやね！？

マイケル馬鹿なの！？ 死ぬの！？

「うーん、どうだよ。これで満足していい。

「お前だけにあらかじめ伝えておいたが、何うてな」

何？俺にどうしようと？

「二年、誰か元気がいい話しておへと安心つかんや」と

「知らねえよ！」

## 何だよその理由！

「遅いわ！」

そして夜。

俺達は今、ギルド全員 + で会議中だ。  
もちろん、明日魔王が復活するからだ。  
んで、+ といつのは、

「皆、こひらこひらじゅるのむ、魔王復活の予言をなしつた大魔導士、ガロン様だ。」

……マイケルの紹介の通り、ガロンとかいう大魔導士兼予言者の爺さんだ。

何でもこの爺さんの予言は今までほぼ100%の確率で当たってきたりしい。

その爺さん曰く、

「魔王を封印するには『聖なる剣』が必要じゃ……

『聖なる剣』が見つからん限り、再び封印するのは無理じゃ……それに見つかったとしても、『聖なる剣』は『選ばれし者』しか使えぬ……

じやから、魔王を封印するのは無理じゃ。」

……とまあ、こんな感じらしい。  
そりて爺さんは付け加える。

「『聖なる剣』が無くとも倒せることは倒せるが……  
3ヶ月もすればまた復活するじゃねつて……」

「さ、3ヶ月……」

空気が絶望の色に染まつていく。

結局その後も議論が交わされたが、出された結論は、

『明日から明後日の毎過ぎまでに住民を避難せしむ

とこうものだった。

そしてついに、その日は来た。

「よし、これで全員だな」

マイケルは確認を取ると、

「よし、俺達もさっそく避難するといよいよ！」

自分達も避難しようと馬車に乗り込んでいった。

「…………ふう

俺は活気の失せた街を見て、溜め息をついた。  
何というか、すっかり寂しくなっちゃったな……

「おー、ゴウ！  
わざと乗れ！」

ボーッとしていた俺にマイケルが声をかける。

「あー…

先に行つといて」

適当に返事する俺。

「なー?」

驚きを隠せないマイケル。

「あー、勘違いすんなよ。  
ちょっと、野暮用があつてね。  
直ぐに合流するから先に行つておいてくれよ」

そう補足しておく。

「……分かった。

直ぐに来いよ！」

「へいへい」

走り去つていく複数の馬車。  
そして街から、人が消えた。  
俺1人を除いて

「日が傾いてきたな……」

辺りをみると、日が沈もうとしていた。

「しつかし、ホントに来るのかねえ」

しつ咳きながら、俺は広場の入り口でうひうひしていた、

その時、

ピキィーンー！

妙に高い音と共に、広場の中央に紫色の魔法陣が描かれた。

「よつやくお出ましかい……」

辺りに地響きが起る。

そして、魔法陣の中央から光が発せられた。

「眩<sup>マブツ</sup>ッ！！」

思わず目を閉じてしまった。

「…フン、久しぶりだな…人間界は」

不意に、貴祿を持った低い声が聞こえた。

目を開けると、慎重3メートルくらいの大男がいた。

蒼髪で紅眼、褐色の肌の持ち主だ。

黒い服に黒いパンツを纏い、それを包み隠すように羽織られた紫色のマント。

そして何より印象的だったのが、こめかみの辺りから生えている、2本の禍々しい角。

間違い無い、コイツが魔王だ。

「……アンタが魔王か？」

取りあえず訊いてみる。

「如何にも。

我が名はバミューダ。

魔物の頂点に立つものなり」

返ってきたのは、予想通りの答え。

「ふーん。

とにかくで、アンタこれからどうすんの？」

こちらも一応訊いてみる。

あーあ、「どこか適当な職を見つけて生活する」とか言つてくれねえかなー。

「もちろん、この世界を征服する

こちらもまた予想通りの答えが返つてきやがりましたよ。ちくせう。

「じで、貴様は何者だ？」

あ、俺？

「俺は……ただの一般人だ」

適当に返しておいた。

「フン。

で、貴様の目的は何だ？」

俺の目的、ねえ…

「そりゃもちろん、アンタの野望を止めることだ」

「戯れ言を……」

「戯れ言、ねえ…

俺からしちゃあ、アンタの言つてることの方が戯れ言に聞こえるけどな」

「黙れ！」

突然吠えたかと思うと、魔王バミユーダは剣を出現させると、そのまま俺に斬りかかってきた。

俺も手早く2本の曲刀<sup>テグハ</sup>『双騎當千』を取り出して剣を受け止めた。つたく、防御しちまつたじやねえか…

「ほひ、面白い！

人間如きが我に刃向かうとはな！」

「あ？

あんまり人間ナメンじゃねえぞクズが！」

しばらくの鎧迫り合いの後、互いに後退すると、

「人間よ！！

我に刃向かつたことを後悔するがいい！！」

「Back to hell！！

（もう1回眠つとけ！！）」

暴言といつたのが決戦状を叩きつけたのであつた。

## Chapter 1 : episode 7 (banana shirts) . 告白

感想を書いて下さった方々、お気に入り登録して下さった方々、そして全ての読者様、本当にありがとうございます！！。  
これからも頑張っていきたいと思つておりますので、これからも宜しくお願い致します！！

次回予告（もちろん嘘）

『カウビバ』コーダのイケナイ関係が始まり…！？

ハハハ期待！

ミ（――）ミミ（――）ミミ（――）ミ

遅れてすみませんでしたアー！！

「ハアツ！」

「セラツ！」

剣戟が飛び交う。

紫の軌跡、黄色の双光。

「セイツ！」

それらが描くは煌めく火花。

「ぐう！」

それらが奏でるは戦場ならではの狂想曲。

「ハイヤ！」

「だらあ！」

はい、どーも。

ゴウ・ディビスです。

俺は今、絶賛決闘中です。

しかも相手は魔王ときました。

多分Dランクは軽く越えてるだろうね。

「フツ！」

「おつとー！」

うは、コイツやつぱ強え。

さつきから俺は剣による防御しかしていない。

さつき言った『剣戟が飛び交つ』ってのも、厳密に言えば相手が攻めてこっちが受ける、ということだ。

しかも多分アイツはまだ様子見の段階だらつ。

一撃こそ重いものの、奴の様子からしてまだ本気は出していないようと思われる。

……ま、かく言つ俺もまだ様子見の段階なんだけど。

「セイツー！」

「オラー！」

しかし、このままじや何も進展しねえな。

そろそろ反撃とこきますか。

「ハアツー！」

魔王ことバミユーダの突きが向かつてくる。

しかし俺は体を捻つて軽く回避し、そのままバミユーダの背後に。その勢いを逃さないよつて、その勢いを剣に乗せ、

「つらあー！」

バミユーダ曰掛けて斬りかかる。

しかし、奴はその紫色の大剣 大剣つて言つても、曰の前の口  
イツは片手で軽々と振り回しているのだが で俺の一撃を受け止める。

「チツー！」

バニユーダは小さく舌打ちをし、バックステップで俺と距離を取ると、

「混沌に埋もれし闇の巨人……」

何かブツブツと独り言を口にした。

その間、奴の足元には魔法陣が現れていたので、十中八九魔術の詠唱と見做して間違いないだろう。

「ブツブツ五月蠅えよー！」

今が好機。そう認識した俺は奴に肉薄し、右の曲刀テグハを振りかぶる。が、

「なつ！？」

俺の一撃は、奴に容易く防がれた。  
詠唱しながら、剣を使ってきた。

しかし、右手は防がれたが、左はまだ残っている。

それを瞬時に察した俺は、左の曲刀テグハを奴目掛けて振り下ろす。

しかしそれも、奴は詠唱しながら避けやがった。

「クソ！」

思わず愚痴をこぼしてしまった。

それくらいに有り得ないのだ。

詠唱しながら何か別のことをする、ということは。

普通の奴ならば、術の詠唱をするときは周りが見えなくなるくらいの集中力が必要とされると言われている。

何か別のことをするのならば、まず詠唱を止めることが一番に優先

される」とになる。

つまり、詠唱しながら何か別のことをする、なんていつ抜瀬は、普通の奴らには不可能なのだ。

改めて実感させられた。

そんな恭順を軽くやつてのせるマイシは、またじへ、

化け物だ、とこいつ」とい。

「『ゲヘナ・ヒガント』！！」

なんだかんだで詠唱を完了させたバニユーダの声が響き渡る。それと同時に奴の右肩辺りからドス黒くて丸太のように太い腕が生えた。

「いぐぞ」

そんな腕を生やしたバニユーダがこちらに接近してきた。

「ハツ！ セイ！ ハアツ！ .....！」

繰り出される大剣と黒腕のラッシュ。

俺は剣の方は受け流すような感じで、黒腕の方はとにかく回避して奴の攻撃をいなす。

「どうした人間！？ 貴様の力はそんなものか！？」

「あー？ 五月蠅えな！！」

相手が何か挑発してきやがったので、こちも適当に返しておく。

口調が荒いのは「愛嬌」ことである。

……つーか、このままやられつ放しつてのも何か気に入らない。なので、ここからまた反撃を開始することに。

「セイヤアア！」

一際大きな声を出したかと思つと、奴は黒腕を俺目掛けて振り下ろしてきた。

直後、けたたましい音が響き渡つたかと思つと、辺りが土煙に覆われた。

かと思えば、すぐさま静寂が訪れる。

「フン、終わつたか」

その静寂も一瞬。

それを破つたのは、バニユーダの呟き。  
それと、

「ウオオラアーー！」

大鎧『弧無双』<sup>（ヒカルヂュウ）</sup>を装備した、俺の雄叫び。

「な！？」

「ブツ飛びなーー！」

バニユーダは雄叫びによつて俺の生存に気付いたらしいが、もう遅い。

バニユーダが振り向いた直後、奴は思い切り吹っ飛んだ  
実はこの俺、見事回避に成功していたのだ。

まあ、このくらい訳ないが。

その後土煙を利用して俺は奴の背後に回り、曲刀『双騎当千』をしまつと、弧無双を出現させる。

そして、ドカンと一発、ね。

でも流石は魔王。

華麗に受け身を取ると、これまた華麗に着地しやがった。  
全く、タフな奴だ。

何時頃終わるか見当がつかねえや。

「……人間よ」

バミューーダが俺に話しかけてきた。

「今のは効いたぞ……！」

その声からは、俺を見下した感じはしなかつた。

「人間、名は何といつ？」

「……へ？」

何故かバミューーダが名前を訊いてきた。

「……ゴウ。

ゴウ・デイビス、だ」

理由は分からぬが、損することでは無いと踏んだ俺は、素直に名乗ることに。『

「……そつか。

いや、何、お前をそいつの人間と一緒にするなど勿体無いと思つて  
な

俺が欲してもい理由をバミコーダは淡々と語ると、

「ハウ・デイビスよー。」

今し方知ったばかりの俺の名を呼び、

「これから我、バミコーダは真の力を解放する！」

堂々と宣言してきた。

その途端、バミコーダの体を黒い”何か”が包んだ。

その”何か”は、言い表すなら、まさしく”闇”。

「その田に真の絶望とこつもの焼き付かせてやれー！」

”闇”の中から奴の高らかな声が聞こえてくる。

それと同時に、”闇”が吹き飛んだ。

「な……」

俺は思わず、絶句した。

”闇”を吹き飛ばして現れたバミコーダは、姿形が変わっていた。

その姿、まさしく”魔王”。

奴の体の周りには先ほどの”闇”と同じようなものが真夏の道路の蜃気楼のように漂つており、

奴の角は伸び、

奴の田の田色は黒色に変わり、その中心に宿む紅色をやがて田立たせ、

奴の紫色のマントは左右対称に綺麗に裂け、翼のよつになつた。

さらに、奴の背後にはギリシア文字の『』を彷彿させるような魔

法陣、というよりは聖痕<sup>ステイグマ</sup>が具現化したようなもの　まあ、相手が魔王<sup>マジック</sup>というだけに、”聖”痕という表現が正しいのかは甚だ疑問だが　　が2つほど描かれている。

そんな姿で、バミユーダは浮いていた。

簡単に言つと、あれだらう。

RPGにはお決まりの、魔王特有の”第2形態”という奴だらう。

「これが我の、力の全てだ！！」

まるで王が民衆に演説するような口振りでバミユーダは言葉を発した。  
そして、俺は思つた。

面倒臭えのが相手になつた、と。

中間テストめ  
忌々しい奴よ……

○ ○ 次回予告 ○ ○

ゴウvsバニーダ、戦いはさうにヒートアップ！

んづけ期待！！

今回短いです。  
だって急いでたんだもん！

「いくぞ！」

「ゴウ・デイビイイイイス！！」

突如第2形態となつたバミューダ。

そんなバミュー・ダが俺の名を呼び、剣を掲げた。するとそこに、膨大な魔力が蓄積される。

そして、

「ハアアアアアアアーー！」

突きを放つてきた。

一その場から1歩も動かずに『・・・・・・・・・・・・』。  
そして、剣の先から、特大の衝撃波が放たれ、俺に迫り来る。

「な！」

何て魔力だ！

これじゃ流石の俺も避けられ

る！

「よつと

「！？」

軽く避ける俺。そんな俺にバミューダは少々驚いてる様子。

「H A H A H A ~ ~ ~

俺がこの程度の衝撃波でどうにかなるとでも思ったKA!?」

気分上場でバミコーダに言つてやつた後、ふと振り返つてみると、

「……アレ?」

何か街がエラいことになつていていた。

街に、横穴がぽっかりとあいているのだ。

まるで何かに刺突されたような感じになつていた。

……これはもしかして……

「クツ!

我の刺突を避けるとは……」

もしかしなくてもコイツだった。

「ならば……

これならどうだ!」

奴は声を荒げると、その場から動かずに右手を胸元に持つて行き、何かを握る動作をした。

刹那、俺の本能が俺自身に呼びかけた。

今すぐその場を離れる、と。

それは所謂”勘”という奴だったが、その”勘”とやらも戦場では

馬鹿に出来ないことを知っていた俺はすぐさまサイドステップを踏む。

勘が働いてからその場を離れるまで、コンマ一秒にも満たなかつた。つーか、そんだけ時間かかっていたら俺は、

地面から生えた黒く禍々しい腕に驚捆みにされていたであろうからだ。

「エエ～、危なかつたぜ」

ひとまず溜め息を吐く俺。

だが、奴は一服つく自由さえも奪うようである。

ソフトボールくらいの大きさの魔力弾を約30個ほど生成すると、全てを俺に狙いを定めて撃つてきた。

「チツ！」

俺は舌打ちをしながらも、回避の体勢に入る。が、すぐにその体勢を解除。

曲刀『双騎当千』をそれぞれの手に取り、迎撃の体勢へ。様子見その2はここまでだ。

「ハツハア！」

俺は一気に飛び出してきた禍々しい魔力弾に対し斬り刻むように双騎当千を振り回す。

それは一瞬。

だが俺はその瞬間に舞つた。

迅速に、きめ細やかに舞つた  
その舞いにより一瞬にして襲いかかってきた魔力弾は全て破壊され  
た。

「なー?」

驚嘆するバミユーダ。

それはそうだろう。

自身の本気の力を一度ならず2度までも伸したのだ。  
そんなバミユーダに対し、俺は平然としていた。

……さっきの魔力弾を全て破壊した時に、俺の勝利への自信はさら  
に強まった。

さて、次は何が来るのやら。

そう思いながら俺は大きく伸びをし、  
そこで気付いた。

「……もうやるやう日も落ちるな

最初から夕方だったが、どうやらいつの間にかそろそろ日没すると  
いう時間まで戦っていたらしい。

「……こりゃ彼奴ら心配するな」

一人呟く。

もうひん彼奴らといつのはビキノスの連中のことだ。

「……なあ

俺は宙に浮いているバミユーダに問いかけた。

「そろそろ終わりにしねえか？」

返答は受け付けない。

奴の元へエア・フロアを駆使して突っ込む。

「速！」

奴が何か言ったが、この際シカトだ。奴が剣を前に出して防御体勢に入る。それに対しても俺は横一文字の攻撃を、

繰り出さなかつた。

繰り出すフリをして、少し飛び、奴のがら空きの頭上へ。

そして一瞬の内に双騎当千をしまい、大鎧『孤無双』を手に取り、

「fall down（落ちやがれ）！！」

思い切り相手の脳天にブチかましてやつた。

「グウツ！」

予想外であったであろう頭上からの攻撃を防ぐことのできなかつた  
バミユーダは地面へと落下していく。

「もう一発！」

そんな奴に俺は剣に魔力を溜め、斬撃の衝撃波を2つ放つ。

空中からの迫撃をくらつたバミュー<sup>ダ</sup>はせりて落下の速度を上げてしまい、受け身を取ることが出来ず、

「ガアツ！！」

地面上に激突。

だが、俺のラッショウは止まらない。

エア・フロアを駆使し、俺自身も地面上に突っ込む。そして激突したばかりで隙だらけの奴に、

「ゼアアアアアア！！」

俺自身が黄色い魔力を纏い、ほぼ音速で奴の懷に突っ込んだ。

「……」

悲鳴は聞こえない。

それはそうだろう。

今のが俺が持っている最強の技だからだ。

俺が纏つた魔力は、バミュー<sup>ダ</sup>が纏つた魔力の何倍も濃いものだ。この魔力が無ければ、音速で突っ込む時に発生する衝撃波で俺もボロボロだつただろう。

この衝撃波はそこいらの衝撃波とは格が違う。しかもこの魔力、自身を守るだけでなくこの衝突の攻撃力を上げてくれるという、まさにじご都合主義な代物だ。

「……」

氣絶しながら徐々に蒸発していくバミュー<sup>ダ</sup>。  
死に逝く  
でもコイツ、また3ヶ月すりゃ復活するんだよな……

「……面倒な奴だなアンタは」

呟くよついで言い放つ。

相手が聞いてようが聞いてまいがそんなの関係無い。

「……行くか」

そつぬき、俺はそこを去ろうとして、  
そこで気付いた。

「…………あぢやー」

わっさの音速の突進で舞った土煙が晴れたところだった。

「…………やり過ぎたか?」

街は、ボロボロだった。

主に地面が。

…………わっさの俺の攻撃で、辺り一面に地面にヒビが入っていた。

「…………手加減したんだけどなー」

まあ、大方魔王の所為にしておいつ。

そんなことを思いながら、俺はビキノスを去つていった。

空を見上げると、ポツポツと淡い光を放つ星が輝き始めていた。

Chapter 1 : episode 9 (banana side) ; 魔

○ ○ 次回予告 ○ ○

「コウ、「巫女服に貧乳、……」

俺の趣味にジャストミート！」

『NTR期待！』

亀更新ですみませんでした。

そしてパラボレーション中断ですみませんでしたー。

m(— —) m

不幸なことに、強盗団に出てわしました。

「オラア！ 早く金渡せ！」

「この娘がどうなつてもいいのかア！」

「殺しちまうぞ？ 早くしねえと殺しちまうぞ！？」

……とこうより、人質に取られたといふべきでしょうか。……言  
われなくとも、そういうべきでしょう。

しかも強盗達はなんかベタな台詞を言つています。まあ、そんな  
連中の人質に取られる私も私ですが。

どうしてこんなことになつたんでしょう。と、回想してみると……  
……ものの数秒で終わつてしましました。それは私が人質に取ら  
れた理由が如何に単純であるかを表しているようだ。

『銀行に入つたらたまたま強盗団がいて、ソイツらがたまたま入り  
口に固まつた形でいて、そこに私が入つて、そのままナイフを向け  
られて人質になつた』

終わり。

これで回想終わり。

……これをさらにまとめてみました。

『たまたま近くにいたから人質になつた』  
終了。これ以上もこれ以下もありません。

「ハア……」

思わず溜め息が出てしました。それはそうでしょう。たまた  
ま人質にされるなんて、悪運にも程があります。あゝあ、何で今日  
はこんなに不幸なんでしょう。

「さつさと金出しやがれ！」

朝乗った馬車は馬が脱走した所為で1時間遅れての発車でしたし、途中から雨降ったからちょっと濡れましたし、お陰で新しい勤め先には初日から遅刻になりますし……

「兄貴～、見せしめにコイシの耳切ってやつましうザエー！」

「お、そりゃいいな！」

そしてこの強盗。はあ、今日は厄日なのでしょうか。

……オマケに強盗って、壮大なトラウマがあるんですけど……

「おじテメエら、早く金出をなこと……」

……と、怒声やらざわめきやらで溢れかえっているこの空間の中で一人呑氣にそんなことを考えていると、

「……まずは耳を切らせて貰ひづぜーー！」

突然耳を引っ張られ、付け根にナイフを突きつけられました。

「なー？」

驚愕する銀行員ギャラリーと一般客。その反応を見て満足感を得る強盗達。

下品な笑顔がさらに一層深くなる。

しかし、当の人質本人はといいますと、

「……ハア」

……今日で何度もだつたでしょうか。また溜め息が出てしました。

した。何なのでしょう、私何も悪いことしてないのに……

オマケにこの強盗達、かなりの小物見えます。もうその辺のチ  
ンピラのほうが身体的にも精神的にも強いと思われる程です。

「…………嫌な日」

…………どうしようもない事を吐き出していました。

直後、

私をホールドしていた男が吹っ飛びました。

「…………は？」

またしても周りが驚愕の表情を浮かべていますが、先程とは違つて困惑の色も混ざつていています。ある者は眉毛をハの字にし、ある者は口を見開き、ある者は口を大きく開けたまま動かないでいます。

それはそうでしょう。なんせ男を吹っ飛ばしたのは、

「…………私ね」

赤いショートヘアを揺らし、

「今日ははとつてもストレス溜まっているんですよ」

紅いワンピースを靡かせる、

「だから……」

林檎みたいなこの私、

「サンドバックになりなさい」

エレン・レッドストーンでしたから。

「な、ななな……」

……辺りを見回すと、私のことをジーツと凝視する強盗達の滑稽な顔が。ま、それはそうですよね。ゴツい仲間がその辺の女の子に吹き飛ばされたのですから、無理もない話です。

で判断

五月蠅い。

今のはホントに五月蠅かつた。口を開けたままでいた強盗団の1人がいきなり大声を出しやがつたのです。それでも顔は滑稽なまま

それにもしても、改めて思います。この強盗達、小物ですね。強さ

としても、男としてでも。普通、女人に対して”化け物”なんて言う男の人なんていないでしょうに。

と、心中ではそう思つたりしますが、それは現実では有り得ないこと。確かに日常生活の中で女人に”化け物”なんて言う男の人がいたら、その男はまさしくクズ確定でしょう。しかしその女人が絡んできたチンピラ達を目の前で秒殺したら、どんな男も紳士の風格を捨て去り、その女を化け物扱いするのではないでしょうね。男の目の前にいるのは麗しい淑女レディではなく、人間の皮を被つた何かモンスターなのですから。

……つと、閑話休題。今は無駄話に一人で花を咲かせる時間ではなかつたのでしたね。

「……さて」

今一度強盗達を見てみると、まだ統制は取れていないです。やっぱり小物です。もし私が強盗団のリーダーでしたら統制を取り、新たな人質を取つたりなど、何らかのアクションを起こしていますね。その方が何もないよりはマシだと思いますから。

しかし無能な強盗達は相変わらずパニックに陥つたまま。そんな彼らに私は、

「……もういいでしょうか？」

と、問う。但し返答は待ちません。返答を耳に入れる前に

「フツ！」

私の蹴りがヒットし、また1人撃破。全く、雑魚すぎます。流石小物。もちろん小物如きにこの流れは止められません。今吹き飛ばした男の懐からナイフが飛び出したのを見逃さなかつた私は宙に舞

うそれを素早くキャッチ。そして別の男の肩掛けで打ち放つ。

「グガツ！」

見事に突き刺さりました。うん、ダーツだつたらド真ん中でしたね。

私はそのまま流れでまた別の男の手を取る、といつより掴むと、

「ハアアアア……」

腰と右腕の動きを利用してその男を振り回し、

「セヤアアア……」

そのまま、肩にナイフの刺さった男田掛けて投擲<sup>とうりゅう</sup>。肩ナイフ男は投げられた男と共に撃沈してしまいました。

「か、囮め！」

やつと相手のリーダーが指示を出したようです。その命令に合わせて部下達も私を囮みます。さつきよりも大分良い動きで。……なるほど、と、一人感心してしまいました。この強盗団、指示待ち人間が多いようです。

因みに私はとこいつ、「こ丁寧に強盗達に囮まれてやりましたよ。あ、もちろん故意に、ですよ。ハンデですよ。何か問題でも？と、そういうしている内に、相手も私を囮み終わつたよ……

「おつと」

私は後ろから迫る気配に気付き、後ろに鍔の形を象つた左手を配

置し、その鍔を素早く閉じました。するとビリビリでしょう。そこにはメタリックな刃が美しい、それでもって無骨なナイフがあるではないですか。そしてナイフの柄には、岩の形を象ったガッシュシリした男の拳が。

「んなー!?」

「あら」

漸く私が振り返ると、そのナイフの持ち主はおそらく強盗達の中でも一番のパワーを持つている事が推測できました。理由は単純。筋肉の量が他の男と比べて圧倒的に多いから。

しかし、女の私が言うのもなんですが、私の前に出ればそいつの女子供と対して変わりはありません。

「えいっ」

ナイフを挟んでいる左手を捻る。それだけで男のナイフは折れてしましました。

そのまま直後に男の腕を掴むと、

「邪魔」

背後から襲つてきた別の男達を巻き込む形で振り回し、振り回し、振り回す。最後に、掴んでいた男を天井目掛けて打ち上げる。

と、間髪入れずにまた新しい連中が襲いかかってきました。全く、小物の癖に元気な連中ですこと。まるで外で元気良く遊ぶ子供を見ているかのようです。

……というか、我まだ自分の武器も出していないのに何ですか、この体たらくは。弱すぎでしょ。

と、思考しながら襲いかかってきた男達を一掃。もう描写してや

る価値もありません。

「……あら、残りは貴方だけのようですね」

気付けば、生き残りは強盗団のリーダーただ1人。残りのメンバーは知らずして私が全滅させてしまったらしいです。

「な!?」

「腹、括つて下さいね」

例の小物は私に恐怖したのか、足をガクガクと震わせています。  
そしてその目には、絶望の色が。

……そうです。あなたの目が語つているように、

「もう、あなたは終わりなんですよ」

と、笑顔で宣告してみました。  
すると、

「う

彼はナイフを抜き、私にナイフの先端を向け、

「ああああ

！――

声にならない叫びをあげながら、突進してきました。

「……はあ

私の口から、また溜め息が。正直言つて、そんな攻撃なら放たな

い方がマシです。隙だらけで避けやすい」とこの上ない。しかし私は、

真っ正面から受けてしまいました。

「…………」

辺りに電撃が走る。ギャラリーにも、強盗団のリーダーにも。強盗団のリーダーの顔からは困惑の色が窺えます。今まで無双していた私がこうもあつさり攻撃を受けるとは思っていなかつたようです。しかし暫くして困惑から解放されたのか、

「……クツクツクツ」

彼は笑い出しました。次第にその笑い声は徐々に大きくなり、

「ヒヤハハハハハ！」

最終的に大笑いとなり、辺りに響き渡りました。そうです、どんな結果になろうが、彼は”勝った”のです。私から部下を何人も奪われてしましましたが、氣絶してるだけですが、最終的に彼は私に”勝った”的です。後はこの銀行を乗っ取り、金を奪つて去

るのみ。

そして敗者である私は死んでしまつのです。一度と起きあがらず、生命活動を終つませる。体を冷たくしながら、永遠の眠りにつく……

……どこへ、

「ひどな展開になるとでも？」

「な……？」

またしても辺りに電撃が走りました。強盗団のリーダーも、ギャラリーも、一斉に私の方に体を向ける。凶刃に倒れた筈の女に、体を向ける。

そして心臓部にナイフを突き刺されたまま倒れていた私はといふと、

「よひひひせ」

と、年寄りみたいなことを言いながら、難なく立ち上りました。もちろんこの光景にたいして驚かないような強靭なハートの持ち主はいなかつたようで、辺つばざわつぐのも当然です。因みに強盗団のリーダーはといふと、

「な、ななな……」

胸にナイフを突き立てられたまま屈託のない笑顔でいる私に恐怖しているようです。もつさつきとは比べ物にならない程怯えていらっしゃいます。そんな彼に私は、

「…………ウフフフフフ」

不気味な笑い声を漏らしながら、頭を垂らし、

ゆらり

ゆらり

と、ゆづくつとした足取りで近付いてこきます。

「ヒツ……ヒツ……」

一步、また一步と距離を詰める。

「ぐ、来るなあー！」

彼は何か鳴いているようですが、五月蠅い鳴き声は耳に入れません。徐々に彼を壁に追い詰めます。

彼の背中が壁にぶつかりました。もう逃げる術はありません。それでも私は近付きます。口ツ、口ツ、と、足音を鳴らしながら、ゆらり、ゆらり、と近付きながら。時折自分の顔に自分の血をべつとりつけながら。

ついに、私は彼の目の前まで来ました。距離的にいえば、恋人同

士がキスをする前の時と同じ位の距離です。しかしここでキスをするなどという甘い展開にはなりません。私は垂らしていた頭を上げました。

べつとつと、毒々しい紅をつけた、しかしにんまりと笑う私の顔。手についた紅を彼の頬に付けます。ねつとつと、彼の顔にも私の紅が。

そして私は、囁きました。

「地獄で、足掻け」

○○○○

どうやら、あのギャラリーの中にもギルドの方がいたようです。で、もちろん私の名演技 ナイフを刺される所から強盗団のリーダーを恐怖で気絶させる所まで を見ていたようで。後日、その人から注意を受けました。

「自重して下さい、『アップル暴風』さん」

……私の一つ名は、相変わらずダサイいました。  
……私の一つ名は、相変わらずダサイいました。

やつといじゅロイン登場。

ちなみに今回の話の「鳴こてこむ」は誤訛(あらびせう)。やせじこくへすみません。

感想、アドバイスなど、お待ちしております。

俺、決めたよ……

今度からタグに『亀更新』追加しておくれよ……！

私の名前はHレン。Hレン・レッドストーンです。好きな色は赤。身長158cmで、体重は……女の子にそんなこと訊くのですか？と、軽い自己アピールをする分などにでもいる普通の女性と変わりはないのですが……

「90……あと10体ですか」

……いや戦闘となるとあら不思議。そいらぐんの歴戦の戦士ですらも震んで見える程の化け物に変貌してしまつのです。その強さから周りからは

### 『アップル暴風』

と呼ばれています。

ええ、自分でも思いますよ。ああ、なんてダサい一つ名なんだろう、って。でも仕方ないじゃないですか。この呼び名を付けたのは私ではなく周りの人なんですから。

と、まあ、私の自己紹介はこれくらいにして、現在の状況を説明しましょうか。

「……一気に終わらせます」

デビルピッグというモンスターに囮まれてます。デビルピッグというのはその辺の雑魚モンスターの一角なのですが、一応ランクはC。一体一体の強さはランクCくらいなのですが、

このモンスター、無駄に連携が優れており、そのことがあってCランクモンスターに位置付けられているのです。まあ、私はその連携ごと潰してしまいますがね。ほら、もう残り10体。

「ブ、ブヴヴヴヴヴ…！」

……おや、敵の一體が鳴きましたよ。また何かしらの連携が来るでしょうね。

「ブヴヴヴヴヴ…！」

おや、全員突っ込んで来ましたね。でもよく見ると、一體一體のスピードが違う。そしてブタ達は一斉に私めがけて体当たりを仕掛けたのです。巧妙にも、一體一體軌道までも違います。あるものは頭を、あるものは足を、あるものは鳩尾を。

狙われてる私が言うのも何ですが、一體一體の軌道を変えるのは良い策だと思います。ですが、スピードを変えたのは間違いでしたね。スピードを変えるといふことは、則ち”順番”が発生することを意味します。つまり私は、一襲つてくる順番を把握することが出来る《・・・・・・・・》のです。順番を把握したら後は簡単。

「フツ、ハツ、ヤツ、セイツ…………！」

順番通りに防御するだけです。僅かに生じているタイムラグを見切り、頭、脚、腹、と、デビルピッグが襲いかかるのを左手の盾で防ぐ。すると驚く程にブタさん達が弾かれていきます。

そして盾で防ぎきった私は、

「ハツ、セイ！」

右手の棍棒<sup>メイス</sup>で相手を葬る。今ので前方の4体がご臨終なさったようです。そして私は残党を出すくまなど当然するはずもない訳でして。

「セヤー。」

鈍い音が辺りに響き、100体目のがビルピッグが息を引き取りました。

〇〇〇〇

ギルド、スターナ支部。私が今現在勤めている場所です。実は今回のがビルピッグ100体討伐もギルドの依頼として、今ギルドリーダーに報告を行っています。と、そこに、

「「めんぐださい。ギルドはこちひで合いつてますの?」

見るからにどこかの貴族のお嬢様のような、それでいてツーンとした雰囲気を纏つた女性が訪問してきました。もちろんギルドのメンバーではありません。その令嬢を、ギルドメンバーの1人は依頼用カウンターにお通します。令嬢は淡々と依頼内容を説明し、そのギルドメンバーは説明を簡略化して用紙に書いていきます。

そんな2人を尻目に私は報告を終えました。そしてその場で報酬を貰います。ところが……

「 300マーラって…… やけに少ない報酬ですね。依頼のランクに見合つてないようですが」

マーラと言づのま、こちらの通貨の名前です。しかし今私が毒付いた通り、何故か今受け取った報酬が従来の報酬と比べて明らかに少ないです。私の皮肉に対しギルドリーダーは顔を滲らせた後に申し訳なさそうな聲音で返してきました。

「悪いな。こここのギルドはちと不景氣でな」

「ちょっとのレベルでは済まない程じゃないですか？」

「……すまん」

ギルドリーダーはそこで一回言葉を区切り、私に”耳貸せ”と合図を送りました。

「……実はこの街 자체、貧富の差が凄くてな。この街にはあそこにいるお嬢さんみたいな金持ちか、オイラ達みたいな貧乏人しかいい訳よ」

「何故、そこまでに差があるのですか？」

「……明日の夕食時になつたら分かる」

そこで私達は距離を取り直します。話が中途半端になりましたが、ギルドリーダーも暇ではありません。

「ありがとうございました、ギルドリーダー」

これにて、依頼完了です。礼を言い、夕食を取ろうと報告用カウ

ンターから離れようとした時、

「……なんで名前で呼んでくれないんだ?」

と、ギルドリーダーの寂しそうな声が。……申し訳ありませんが、  
私……

「……名前、何でしたっけ?」

ギルドリーダーの名前、忘れちゃいました。

「……ジョナサンだ」

○○○○

夜が明けて、朝が来ました。おはようございます。エレン・レッドストーンです。今日もギルドの仕事を頑張ってこなしたいと思います。

といつ気持ちで掲示板の依頼を見てみると……

「……孤児院の修理作業及び清掃?」

一つの依頼に目が止まりました。こういう依頼は珍しくなく、むしろモンスターの退治よりも生活に係わる依頼の方が多いのです。

落とし物捜しだとか、博物館の警備だとか、荷物の宅配だとか。しかし私が注目したのはそこではなく。

「ジョナサン」

「何だ」

「この依頼、私が受けさせて貰います」

と言い、例の依頼の紙を差し出しました。しかし、

「……エレン」

「何でしう」

「これ、参加人数6人以上じゃないと駄目なんだが」「あれ？」

嘘じやないぞ、と言わんばかりにジョナサンは”依頼条件”の項目に指をさす。そこには確かに『6人以上必須』と、バツチリ書かれていた。

「意外におっちょこちよいなんだな、アップル暴風」「か、からかわないで下さい！」

僅かに恥ずかしさを感じて、顔を赤くする私。……これじゃあ、さらに林檎じやないですか。

と、そこに、

「ふむ、先を越されてしまったかのう……」

そう呟きながらこちらに歩み寄つてきたのは、このギルドで最高齢のベテランギルドメンバー、マック。見た目は如何にも紳士なのですが、今まで左手の杖一本で敵を駆逐してきた、凄腕おじいちゃ

んらしいです。

「ジヨナサンや」

「どうしました、マックさん？」

普段はギルドメンバーの誰に対してもタメ口のジヨナサンも、この人に対するだけは口調が丁寧になります。

「『孤児院の修理作業及び清掃』といつ依頼があつた筈じやが……先を越されてしまつたかのう？」

何といつ偶然でしよう。

「1人確保。残り4人ですね」

「何じや？」

「実は……」

私が発した言葉に疑問を持つマックさんにジヨナサンは間髪入れず、そして懇切丁寧に説明しました。すると……

「……キール、セーラ」

「どうした、父さん」

「おじいちゃん、どうしたの？」

マックさんの息子のキール、その娘のセーラが呼ばれてこちらに来ました。私は問答無用で2人を追加します。

「ジヨナサン、残り2人、ですね」

「何が？」

「実は……」

疑問符を浮かべる2人に「これまたジョナサンはイチから説明しました。するとまた……」

「うーん、なら……メル！」

「あ、何い？」

「「」」ち来て！」

言われて来たのは、ブラウンの髪をツーサイドアップにしている、勝ち気な少女、メル。当然彼女も、

「1人追加。何といふ芋づる式でしょ」

「あ、何よう？」

「実は……」

ジョナサン説明中……

「いいわよ」

あつさり承諾したメル。といつが全員即座に了承してくれましたね。皆さんいい人です。

しかしそう旨くいく筈もなく、その後、なんどギルドメンバー全員に断られました。

「はあ……」

思わず溜め息が出ます。「」」で終わりか。そう思った時でした。

「ギルド、スターナ支部は「」」か？」

現れたのは、1人の男……

「…?」

私は男の姿に驚愕しました。

男は緑の髪を持ち、顔は美青年という言葉が似合つくらいに美しく。雪のような真っ白な肌をしています。慎重は170cmくらいと少し低め。手や足は淡いベージュのローブを着ている所為で全く見えません。それどころか、紺のマフラーを着用していて口の周りも覆われて見えなくなっています。

と、ここまで普通の範疇に入るのですが……問題は男の髪型。

私は今まで長髪の男性を沢山見てきました。そう珍しくもないからです。また、その髪を纏めている男性も珍しくありません。現に、キールも腰まである髪をポニーtailにしています。  
ですが……

ツインテールの男性は流石に初めて見ました。

「ギルド移籍の手続きをしたいのだが」

目を見開いている私の横を通り過ぎてその深緑のツインテールの男はギルドリーダーであるジョナサンに歩み寄ります。しかしジョナサンも私に負けないくらいに目を大きく開けています。やはりツインテールには誰もが驚くのでしょうか。しかも、似合っているという奇跡。

ところがジョナサンは、私とは違つたところで驚いていたようだ。

「ア、アンタ、そのツインテール、まさか……」

「…………」

ジョナサンの声に彼は沈黙しました。その顔は、驚くのは後にしろ。取りあえずさつと手続きを終わらせたい。と言わんばかりの物でした。ですがジョナサンの驚嘆の心は膨張していくばかり。そしてそれは意外にも早く破裂しました。

「……『法術王』がきたぞおおおおおお……！」

「…………は？」

『法術王』。

『魔法』あるいは『魔術』とも呼ばれる であるなら何でも使いこなし、さらに上級魔術の詠唱破棄にまで成功したという者。それだけに留まらず、オリジナルの魔法も幾つか作つてしまつたとか。

私も『法術王』の噂はちらほらと聞いたことがあります。ですが……ツインテールのことは知りませんでした。

「ほ、『法術王』！？」

「ホントに！？」

「マジかよ……。」

「何とこい」とじや……。」

『ゼウスナサンの所為で周りに』「法術王」が来た』と  
いつ事実が広まってしまったようです。

「…………」

相変わらず困った顔をした『法術王』が、私に顔を向けてきました。このギルドの中で唯一『法術王』の名を聞いてもさして驚いていない私に。……まあ、私の場合、『ツインテールの男』という新鮮極まりない属性を目の当たりにして呆然としていただけなんですが。その所為で『法術王』のインパクトが薄れていたのが原因なんですね。

「……お前は驚かないのか?」

『法術王』から話しかけて來たので

「……あら、驚いて欲しかったのですか?」

「……いや」

思考回路を取り戻し、適当に返答してみました。私の皮肉に対しても彼の返答は「ノ。」。しかし彼は続けます。

「……出来れば、この喧騒をどうにかしてほしいのだが

と。

そんなこと、『アップル暴風』の私でも無理です。

「いいですよ」

それでも、彼の願いを引き受けた私には、立派な策があります。

「……恩に切る」

「ただし」

しかし、困っているのは彼だけではありません。私だって、別件で困っているのです。

「このクエストに参加してくれたら、の話ですけど」

そう言つて私は例のクエストの紙を彼の目の前に押し付けます。その紙を一瞥した彼は、

「良いだろ？」「

と、あっさり引き受けてくれました。

交渉成立。という訳で、私は『策』を発動します。

「ジョナサン」

その策とは……

「周りの人達を黙らせて下さい。『法術王』がお困りですよ」  
ズバリ、他力本願。こつこつとは、そのグループの長に頼むのが一番なんですよ。

「……お前」

「約束は約束です」

『法術王』が卑怯者を見るかのような目を向けてきましたが、そんなの気にしません。気いたら負けです。

何はともあれ、これで彼の悩みも、私の悩みも消えたので、結果オーライというヤツです。

「……フン」

ジョナサンの一喝で周りが静まった頃、彼は私から視線を外し、ジョナサンへと向けました。そしてあつといつ間に手続きを終わらせると、再び私の方を見て、

「手続きついでに、お前の見せた依頼を受理してきた」

と、わざわざ報告して来ました。

「ありがとうございます」

やつと私は、いや、私達は孤児院に向かうことが出来そうです。と、思い出ましたが、同時に、

「（あれ、この人つて『法術王』とか何とか言われてましたが……、今回のクエストでは特段役に立つ訳ではないのでは？）」

とも、思つてみたり。

なんという微妙な終わらせ方。

次回は孤児院でほのぼの……になるかもしれません。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7975j/>

Burn A Na・Blast ~バナナ・ブラスト~

2011年10月6日17時09分発行